

ウィリアム・テンプル博士

八代 斌 助

一九四八年、自分が戦後最初の日本人として海外渡航を許されたとき、アメリカで友人がつぎのようにいった。「この度の戦争で、米国民が茫然自失したことが二回ある。すなわち、ルーズベルト大統領が死んだときと、大主教テンプルが亡くなったときだ」

テンプルについてのこうした思い出や批判は幾冊かの本になるであろう。日本の教養人に親しみのあるバーナード・ショウの言葉だけをつぎに示しておく。

「現代のだれにとっても、テンプル大主教の教養ある聡明さというものは、はっきりわかっていながら、掴みえないことなんだ。おそらく、ウェストレー（一八三一―一六三年まで、ダブリンの大主教、ナポレオン・ボナパルトについての有名な著書がある）以外に見出すことのできない人物だ。」

まさしくウィリアム・テンプルこそは、神が必要としたときに遣わし給うた世紀の偉人であった。

生い立ちと教育

名家の生まれ、すばらしい学問、恵まれた環境、かれくらい祝福された家に育ったものもあまり多くはあるまい。テンプル家に保存される一枚のリネンの布には、その家系が一本の大きな樹木の形をなしてあらわされている。それにはエドワー

ド・ザ・コンフェサーの友人であつたレオフリック子爵までさかのぼって記されている（一〇五七）。

その詳細をここに示すことはできないが、とにかく英国最上の家族に育つたというわけである。父はフレデリック・テンプルといい、有名なラグビー校の校長、エクセターおよびロンドンの主教をへてカンタベリー大主教になった人である。ウィリアム・デンプルは、この大主教の第二番目の子として、一八八一年十月十五日に誕生した。四歳にして父親とともにロンドンに移り、つづいてランベス宮殿において子ども時代を過した。母親もまた貴族であつたので、子どもの時代は、上流社会の美しい環境のなかで育つた。この家庭生活のかれにおよぼした影響は、とうてい言葉であらわすことができない。

かれは、一八九四年九月、父が校長をしていたラグビー校に入学し、一九〇〇年、バリオル・カレッジ（オクスフォード大学）に入学した。大学の生活は、たえずいかなる課目も最上席であり、学生時代に、すでに二冊の有名な著書を仕遂げたほどで、卒業の翌年、オクスフォード大学クイーンズ・カレッジの教授となつた。

公 生 涯

あまりにも有名にして、多岐多才にわたつたかれの公生涯をここで詳述することは不可能なので、ただそのアウトラインを列記するにとどめる。

かれが執事に任命されたのは一九〇八年で、翌年には司祭に任命された。さっそく学生キリスト教運動（SCM）の指導者となり、一九一〇年にはカンタベリー大主教のチャプレンをつとめ、その年エディンバラの会議においてかれの受けた印象は、かれをして将来エキュメニカル運動の大立物たらしめたものである。ついで一九一四年、ロンドンのピカデリーにある聖ヤコブ教会の牧師をつとめ、翌年皇帝の牧師となり、一九一六年には夫人をめとり、よき伴侶者を与えた。

ただに教会の働きのみならず、一九一七年イギリスにおける中等教育試験委員会の議長に推され、「生活と自由」なる運動の推進者となり、その年や聖コブ教会の牧師を辞任している。

かれの学位は、一九一八年オクスフォード大学より文学博士を受けたが、その後二六年間に受領した博士号は一二にあまり、一一の世界の著名大学より授けられている。

一九二〇年にはウエストミンスター寺院のキャノンとなり、同年フランスを訪問、一九二一年にはマンチェスターの主教となった。有名な大主教任命によるキリスト教教理の委員を命ぜられ、その委員長を勤めた。一九二四年には、いわゆる、今日キリスト教会をして、社会問題、政治問題に関心を持たせるにいたった最初の世界会議である、いわゆるコペック（COPPECK）会議をバーミンガムに主宰して、世界キリスト教会に新しい指針を授けている。翌年、英国議会の貴族院の議員となり、オクスフォード大学クイーンズ・カレッジのフェローとなり、のちビジターとなった。

一九二六年にはさらに民衆の生活に食っているあの大ストライキの問題に関係し、翌年は、「信仰職制」の会議のため、ローザンヌに出張し、明くる一九二八年にはエルサレムの世界宣教会議に出席、翌年ヨークの大主教に選ばれ、信仰職制会議の議長を勤めるにいたる。かくして、ただにキリスト教会に重要な位置を持ったばかりでなく、英国放送協会（BBC）青年教育中央委員の議長を勤め、国民教化の重責をも荷っている。

明くる一九三〇年にランベス会議がロンドンで開催されたときに、キリスト教合同問題の委員長を勤めている。一九三二年には、驚異的な問題を起したジュネーブにおける軍縮会議の開会講演を行なった。

一九三五年になると、アメリカの招きによって、同国内各地に講演の旅をし、同年、英国放送協会の評議委員長に推された。

一九三七年には、オクスフォードにおけるキリスト教生活会議ならびにエディンバラにおける信仰職制会議の議長を勤め、イギリスの図書館協会の総裁となり、さらに母校ラグビー校における世界青年会議に列し、一九四一年マルバーン会議を指導し、同年には、戦時対策委員長を勤め、民主主義陣営の指導者となった。明くる一九四二年はカンタベリー大主教に選ばれ、ヨークの名誉市民となり、ついで一九四三年にはエクセター市の名誉市民となる。一九四四年、南インド教会の問

題につきインド聖公会を指導し、同年九月、戦時中、世界の人びとにいまなお記憶せられる放送を数回にわたってつとめ、その月、病をえて病床に横たわり、十月二十六日永眠された。

コペック会議

テンプル博士が英国聖公会ならびに世界のキリスト教会に貢献した事柄については、あまりにもよく知られていることでもあり、またそれを綴ることは、紙数の関係で許されない。そこで、あまり世に知られていない重要な事柄を二、三拾ってみる。その第一は、一九二四年にバーミンガムにおいて開催されたコペック（COPEC）という会議である。COPECとは、Conference on Christian Politics, Economics and Citizenship の略であって、一九二四年にかれがマンチェスターの主教を勤めていたときに開催された会議であった。

思うに、当時の教会では、キリスト教は個人の魂への関心ということが重大で、社会全体を考えにおくということは、いかにも墮落したもののように取り扱われていたのであった。このことは、今日の日本のキリスト教会においても、宣教師の遺した遺産としてなお見受けられる。資本主義の経済機構が生み出した博愛精神とセンチメンタルな同情といったものが、花子さんの涙をぬぐい、太郎さんの洋服をつづくるといったぐあい、生々としたキリスト教会の使命たる政治、経済、社会を指導し、全体的な人願を救うといったようなことが考えられない。キリスト教会における社会問題の権威者といわれるアメリカのジョン・ベネットは最近のキリスト教会の新しい態度、すなわち、社会秩序の構造にたいする関心について、つぎのようにいっている。「世界におけるこの傾向のもっとも偉大なる代表者は、ウィリアム・テンプル大主教であった」

事実、テンプル博士は、当時の不評を齒牙にもかけず、敢然とキリスト教会が社会に進出するこの歴史的な会議を主宰したのである。

この会議は、じつに一五〇〇人の代議員を集めたものであり、大英帝国のみならず、ヨーロッパ各地、中国ならびに日本

からも代表者が出席したので、皇帝のメッセージはうにおよばず、首相マクドナルドや前首相ボールドウィンおよびアスキスのメッセージも読まれた。かくてキリスト教会は堂々と社会に進出していったのだ。

当時のかれの思想は、労働運動とは、自由と友情の基盤の上に新しい社会を建設する努力であらねばならぬと観じ、教会は当然この問題にたいして同情をあらわすべきだと主張したものである。かれにとっては、労働運動と政党の一派である労働党とは、はっきり区別して割りきられていた。教会は政党に属すべきものではない。たとえみずからが保守党に属していたとしても、この新しい社会建設をする労働運動は助けなければならないと考えていた。そしてそれらのことをかれは開会講演でつぎのようにいっている。

「いまやマキャベリの政策は終止符を打たれたもので、主イエス・キリストの

『我は道なり真なり命なり』

の主張にたいして、その具現に、ただちに応ずべき備えをなさねばならない。

われらはいま、このところに集い、キリスト教会における精神的運動が、この現実の社会における混乱と無秩序のなかにあつて、正しく進められることを願う。われらの機会は重大であるが、その責任はさらに重い。

われらは新しく神に聞き、神の臨在を信じ、神に信頼して会議を進めたい。」

元来、かれがあのだすばらしい家庭に生まれながら、こういった運動に関心をもったということは、子どものころからの生まれついたものであった。七歳のとき、両親に連れられてイギリスの湖沼地帯を訪れたとき、りっぱなホテルに泊って、昼飯にチキンの焼いたものを食べようとしていた。ところがふと、会話の最中に、使用人たちはチキンを食べられず、最上のご馳走がシチューであることを聞いた。突然、少年のテンプルはフォークとナイフを投げ捨てて、大声で泣き出した。両親がどうすることもできないほどの悲しみであった。それ以来のかれは、青年のときにおいてすら、マッチをつかんでも、それをつくり出す労働者が一日十時間の働きにたいしてハシリングしかもらえないことを発見するし、造花をもらっても、こ

れを造るものたちが一日十四時間働いて一〇シリングであることを見出すなど、たえずみずからの生活に反省をもたらしていた。失業ということを教会は反省すべきだと主張したのは、ただ机上の空論ではなかったのだ。

さて、このコペックの大会議は、教会にひとつの幻をあたえた。それは、いわゆるエキュメニカル運動へのひとつの推進であって、すなわち、これがやがて信仰職制の研究となり、ライフ・アンド・ワークの会議への発端となったのである。

うべなるかな、ロフトハウス教授は、テンプル博士の生涯を通じて、「キリスト教と神へのかれの最大の奉仕はコペック会議である」といつている。

エキュメニカル運動

コペック会議のひとつの成果は、エキュメニカル運動にたいして新しい刺激をあたえたことであつた。すなわち従来のたんなる宣教運動というかぎられた題目だけでなしに、もっと広範なキリスト教会の使命が語られ、やがて世界教会会議(WCC)への発展をみるにいたつた。

エキュメニカル運動の発端ともいふべき一九一〇年のエディンバラの会議(IMC)に出席したテンプルは、当時二八歳の青年であつた。この会議は、「信仰職制」という神学上の論争の種になる問題を避けた宣教会議であつたため、英国聖公会内のいわゆる、ハイチャーチの指導者たちの出席が可能になった。すなわちトルボット、フリーヤ、ポーランド、ゴアといったような名士が、そしてテンプル自身、また、列席のよろこびを持ったのであつた。かれはこの会議にそれほど重要な位置を占めていなかった。だが、学生キリスト教運動(SCM)の指導者であつたため、会議後のこの運動の推進に大きな力をもつたのである。一九二八年のエルサレム会議においては、もはやかれは指導者のひとりとなつていた。そして重要な位置を保つて重要な位置を保つていたのである。

周知のごとく、エジンバラ会議に出席したものひとり、フィリピンのブレント主教は、「むずかしい信仰・職制の問題

を討議してこそ、真の教会再一致があるべきだ」と主張した。

かくしてアメリカ聖公会の協賛をえ、一九二〇年のランベス会議の議を経て、ここに「信仰職制」の会議が根強くエキュメニカル運動の一翼を担うにいたったのである。

ときあたかもランベス会議の「全世界のキリスト教徒に訴う」という教会再一致の提案のあったあとでもあり、ジュネーブの準備会には、ゴア、タトラーなどの大立物がイギリスから出席したので、この会議は根強いものとなった。

一九二七年にローザンヌで開かれた会議には、テンプルは年老いたる指導者ブレント、ゼーダーブロム、ダイスマン、ガビー、ヘッドラムおよびゴアたちとともに出席したが、組合教会のブラウンとテンプルは、事実上、大きな役割をなしとげたのである。

かれは、会議では「民の中なるサウル」(一段と秀でているとの意)と呼ばれ、将来の指導者を約束されていた。継続委員長として一九三七年まで七回会議の議長をつとめ、この教会合同の運動の大立物となった。

さらに「ライフ・アンド・ワーク」なる会議が、もうひとつのルーテル教会のウプサラ大主教によって提案され、ここに第三番目のエキュメニカル運動が展開されるに当り、かれはまた、ウッド、ベル、オールドハム、ホブソン、ペートン、ビザトフット、ヘッドラム等とともに、会議の指導者となったのである。

一九三七年の「信仰職制」ならびに「ライフ・アンド・ワーク」両会議は、それぞれイギリスで開かれた。この二つの会議を指導したテンプルにたいして、世界のエキュメニカル運動の指導者たちが協力して、両会議を一丸として世界教会会議(WCC)を構成せしむるにいたったのだ。

かくて、一九三八年、このことの決定をみ、それが一九四八年、アムステルダムにおいて、呱呱の声をあげるにいたったのである。

この項を終るについては、世界のキリスト教会で問題になっている南インド教会のことを記さねばならない。

恐らくテンプルが存在していなかったら、南インドの教会の誕生は不可能であったと思われる。

一九一九年五月、インドにおける三人のキリスト教指導者たちが、フランケバーに集まったのだ。そのうち三〇人までがインド人であった。そして、長年キリスト教会が口ぐせのようにいつていた教会再一致のために、生命的に進んでいくことになった。その指導者がインド聖公会のアザライヤ主教であったのである。

この新しく生まれんとする教会のなかには、インド聖公会の四つの教区が含まれていた。したがって、イギリス聖公会の関心もまた、大いなるものがあったのだ。一九三〇年のランベス会議では、テンプル博士は、教会合同の委員長をしていたので、特別にこの問題を取りあげた。以来、かれの死にいたるまで、この問題は大きな重荷であり、同時に重大な使命でもあった。

聖公会の使命のひとつは、デイスピア（見えなくなること）にあるとの信念をもったテンプルの偉大さを思わねばならぬ。

四つのインドの聖公会の教区が、聖公会という教会から消えてしまつて、ここに新しい教会が神のみ心をたいして誕生したのである。一九三〇年のランベス会議は、かれが教会合同部の委員長を勤めたが、

「生まれ出ずる南インド合同教会は、アングリカン・コンミュニオンのひとつのプロビンスたることができない。しかしユニバーサル・チャーチのプロビンスである。」

と記している。

日本のわれわれが思うほど、この問題はかんたんではないのだ。聖公会、組合、メソジスト、プレスビテリアン、こうした各派がひとつになるということ、生まれ出ずる悩みは大いなるものである。キリストの教会では、エキュメニカル運動を語るはいかにたやすく、これを行なうのはいかに困難かを悟ったのだ。

かれが十数年のあいだ、この問題についてどのくらい多くの人の攻撃に会い、また批判を受けたかはおどろくべきものが

あり、かつ、その忍耐は深く記憶されねばならないことと思う、教会を愛するということは、かくあるべきだと教えてくれたのである。

日本のわれわれに親しみのあるT・S・エリオットなども、一九四三年、反対の一役を買って、テンプルに対抗していた。ただ、これは自分の臆測であるが、テンプルがエキュメニカル運動において成功したのは、多くのハイチャーチの人びとを動かしたという点にあると思う。とかくエキュメニカル運動には、聖公会のローチャーチの人びとが大役を勤めていたが、それでは母体である聖公会が動かされるものでなく、いつまでたっても教会合同はかけ声だけで終わってしまう。テンプルが、いわゆる、イギリス聖公会内のハイチャーチの人びとにこの運動の理解を、忍耐をもってひろめたということは、深くわれわれが学ばねばならないところだ。

博士の片影

最後に、二、三かれの片影を拾ってみよう。

一九二八年、デヴィッドソン大主教は、その金婚式の祝いの日を境として、長い大主教の職を辞任した。ボールドウィン首相は、カンタベリーおよびヨークの両大主教を選ぶために、デヴィッドソン大主教と相談した。テンプル夫妻はデヴィッドソン大主教に招かれて、宮中において首相と会談した。一般的にはテンプルが当然ロンドンの主教となり、それからカンタベリーに移るものと思われていたのだが、そのコースをとらずに、かれは北方ヨークの大主教に補せられたのである。その理由として語られたものは、すでにテンプルの働きが、教会、大学は申すにおよばず、大英帝国内のあらゆる問題、さらに、切っても切れない学生キリスト教運動にまでおよんでいたし、かつまた、第一流の学者、著者、説教者、そういった仕事をまっとうするためには、ヨークの方がよからうということになったのだ。

かれの一日の仕事を記してみれば、毎朝早禱を行ない、つづいて家族の祈りがある。これにはお客さんたちも列席する。

いつも聖書の個所を短く印象深く講義する。その家族の祈りは、じつに全世界にたいする祈りであり、各教区、各教会の事柄が絶えず覚えられていた。

食事の前に自分の個人的な手紙を読んでしまい、一〇時になると秘書の部屋におもむき、ディクテーションをする。それは、まったくそのまま名文章になるといったようなものであった。一般の偉い人たちと違って、けっして書類綴を秘書に持たせてこさせない。ファイルなしに、ああしたときの手紙、こうしたときの返事など、すらすら頭から出てくるのだ。一一時には、すっかり手紙が終ってしまい、それから一日の働きをするといったようなぐあいである。

その読書力はおどろくべきもので、厚い難解な著書などを汽車の中で読みこなしてしまう精力には、だれもが敬服していた。あの老大なトーマス・アクイナスの神学叢書を、三〇代のころ、一瀉千里に読んでしまったなどは、イギリスの神学校にいまなお語り伝えられているところであり、どんなに周囲がさわがしくても平気で読書していた。

その引照もまた、どのへんにこういうことが語られているかをはっきりと知っていたのである。あるときペーター・グリーン（主教に幾度も選任された男）がテンプルから六〇〇ページにあまる哲学史を借りた。テンプルは、

「俺は汽車のなかでもう読んだよ」

といった、長いことかかって読み終ったグリーンが、ひとつおどしてやれと思って、内容の批判をやった。ところが、それに応えて、たったいま読み終ったばかりのグリーンよりも、もっと正確に、もっとときばきとしやべられたのには、さすがのグリーンもいよいよかれにたいする尊敬の心を深くするばかりであったという。

ただこのテンプルには、聖パウロの肉体の苦しみのようなものが子どものころからあつたのだ。それは痛風で、かれの生涯を通じてのトゲであった。これについて名医ハベロック・エリイスは、こう書いている。

「実事この病気は、しばしば起るもので、しかもおどろくべき苦しみをともなう。とくに、かれのような理知的なすばらしい才能を持っている人には、もの凄く苦しみをともなう襲い来る。」

と。しかし、テンプルはそれを人に隠して、その苦悩に堪えていった。とくに戦争中など、この痛風のため膝が動かないほどになっても、空襲の最中に、いつものような笑顔をたたえて、人びとを慰めたものである。

カンタベリーの近くのクロイドンの民衆は、ドイツの爆弾のために、恐怖に襲われて絶望の淵の中にあった。そのとき、テンプルが痛む足を自動車にかくして、民衆を見舞ったのである。そのことによってかれらは甦ったといまでも語られている。

一九四三年ころからは、夫婦のあいだで、しばしば、引退して静かに余生を暮そうなどとの会話が起っていた。しかし、かれは大英国民のみならず、民主陣営の人びとを鼓舞するため、一九四四年九月、歴史的な放送を何回も勤めねばならなかった。あるときは、電線の破壊のために、壇上に立ったまま、一本の杖に痛む足を支え、数時間にわたっての修理を待っていた。放送局長が恐縮して、あやまるためにテンプルの前にきたとき、「おい、ウェルム君、心配なことだろう。こういうことは、待っている身より、君たちの方がどんなにつらいかよくわかるよ」と反対に慰めたほどであった。

かくて、痛風のため、十月二十六日天父に召された。世界は敵も味方もかれの死を悼んだ。半世紀のあいだ、大英国民は、エドワード七世陛下の戴冠式の延期およびキチナー元帥の死という大事件にあっては、かれの死はこの二つのこと以上のショックをあたえた。ルーズベルト大統領は、イギリスの皇帝にたいし長文の弔電を送り、テンプルの功績を称えた。スマッツ元帥は電報を送り、

「世紀の偉人はついに世を去った。

教会、国家、否、全世界は、量るべからざる損失に苦しむであろう」
と悼んだ。

この地球の各国から、民族を越え、階級を越えて、悼みの心が表現された。不幸にして、当時なお戦争の最中であつたため、日本からは悲しみの心を送るなんらの方法もなかったのである。しかし、シンガポールにおける日本の捕虜収容所から

は、りっぱな弔電が送られていた。

ああ、「偉大なる哲学者」「名門の大主教」「真のステートマン」「国際会議の指導者」「世紀の偉人」「正直と真実に覆われた聖徒」「みずからの保有する戦位より遙かに偉大な人」そして「俺たちの大主教」などの称号を身につけたかれテンプルは世を去った。

カンバーランドの百姓の弔辞は「あいつは愉快なやつだった」の言葉で終わっている。

じつにかれは、神が必要なきに備え給うた偉大な人格者であったのである。